

早稲田と文学の一世紀

『早稲田文学』創刊100年記念展図録

早稲田大学図書館編



「早稲田文学」創刊百年記念展

実行委員会

委員長
委員

(事務局)

野口洋二 江中直紀 奥島孝康 紅野敏郎 佐木幸綱 竹盛天雄 中島国彦 平原篤朗 高橋芳樹 金子宏二 松下真也 小川糸子 岡田広之 久保尾俊郎 滝波秀子 竹本希子 長岡三智子 細川正子

平成3年9月30日 印刷
平成3年10月9日 発行

編集 早稲田大学図書館

早稲田と文学の一世紀
「早稲田文学」創刊100年記念展図録

169-50 東京都新宿区西早稲田1-6-1
電話 東京 (03) 3203-4141

印刷・平文社／撮影・コウ写真工房／製作・早稲田大学出版部

早稲田と文学の一世紀

『早稲田文学』創刊100年記念展図録

早稲田大学図書館編

1991年10月

「早稲田と文学の一世紀」展の開催にあたって

早稲田大学図書館長

野 口 洋 二

『早稲田文学』が明治二四年に坪内逍遙によって創刊されてから、今年は百年目にあたります。図書館では、これを記念して、島村抱月時代の第二次『早稲田文学』の復刻を企画するとともに、『早稲田文学』の歩みや、早稲田に青春のページを刻んだ作家たち約三〇〇名の足跡をたどった「早稲田と文学の一世紀」と題する展覧会を開催することにいたしました。

一世紀にわたる『早稲田文学』の歴史は、いうまでもなく近代日本文学史を語るうえで欠かすことのできないものであります。実に多くの優れた作家や評論家や詩人が、早稲田のキャンパスとこの『早稲田文学』から巣立ってゆき、目覚ましい活躍をしてきました。また『早稲田文学』は、演劇や芸能を含む幅広い文芸活動の場としても世の注目を浴び、意欲的に各時代に立ち向かってきた歴史をもっています。

もともと、この企画を進めてゆく中で、私どもが強く感じましたのは、稲門という枠でこれら文学者たちのすべてをくぐることは難しいということでした。個々の作家たちの中には、早稲田という体臭の濃い人もいますし、薄い人もいます。「ああ、この人も早稲田であつたのか」と意外に思う場合もしばしばありました。しかし、まことに強い個性を発揮しながら、集まり散じて星雲のごとくに渦巻きながら活躍しつづける、そうしたものがまさに早稲田の文学者たちの特徴なのかもしれません。

図書館は今年四月に新館がオープンし、二一世紀の大学図書館のあり方を模索しながら新たな活動を開始しました。新館建設を機会に構築してきた「稲門ライブラリー」（本学に学ぶなどしたゆかりの人々の原稿・著作などのコレクション）もその一部ですが、目下それを充実するべく努めております。この展覧会が、「早稲田と文学」の歴史を回顧するにとどまらず、将来に向けて『早稲田文学』の展望を拓いていくための糧となるよう願うと同時に、「稲門ライブラリー」の充実にも役立つよう心から願ってやみません。

開催にあたりましては、沢山の方々から出品に協力していただき、多くの方々にさまざまな協力をしていただきました。深く感謝の意を表します。



画・藪野 健

グリーンハウス

2.7 '84 gab

作家索引

一九七

逍遙と二葉亭	十川 信介	一三
文学科の創設と第一次「早稲田文学」	竹盛 天雄	二三
早稲田「美辞学」の流れ	原 子朗	四四
第二次「早稲田文学」と近代文学の成熟	紅野 敏郎	四五
近代詩をめぐって	原 子朗	七三
四人の同期生	金子 宏二	八二
早稲田と演劇	大笹 吉雄	一〇一
文芸協会と芸術座	菊池 明	一〇八
早稲田の児童文学	前川 康男	一一九
プロレタリア文学・大衆文学をめぐって	高橋 春雄	一三一
江戸川乱歩賞	中島 梓	一四四
早稲田的「冒険」の世界	奥島 孝康	一四四
大正から昭和へ	中島 国彦	一四五
稲門出身文学者と早稲田大学図書館	金子 宏二	一五七
第三次「早稲田文学」	保昌 正夫	一六一
山崎剛平と砂子屋書房	松下 真也	一九一
現代文学と早稲田	平岡 篤頼	一九二
現代文学の流れのなかで―戦後の「早稲田文学」	江中 直紀	一九三
群像 現代の早稲田	編集部	一九四

ことである。これは当時仏
取りとなつて、おもに仏文
したものである。当時の早
ともいうべき季節で、ただ

生まじめな諧謔

安岡 章太郎

井伏鱒二の読者なら、井伏氏がおよそ大言壮語しない人柄であることは、よく承知してゐるであらう。いや、井伏さんは親しい人たちとの酒の席では、ときに豪語に似た発言をされることもあるが、それは必ず諧謔の精神から出たものである。例へば、

「もし、僕が若くしてパリに留学し、絵をまなんでゐれば、いまごろはたぶんアンリ井伏と号して、マチスと並び称せられるやうになつてゐたはずだが……」

といふが如き調子のものである。しかし本当をいふと私は近頃、井伏さんのこの言葉には極く極く微量ながら本音も多少は入つてゐるのではないかと考へるやうになつた。じつは数年前の花見どきに、私たちは十人余りのグループで甲州へ写生旅行に出掛けたことがある。全員がスケッチブックをたづさへ、色鉛筆や水彩絵具、それにイーゼルや折りたたみの三角椅子まで用意した人もゐたが、いざ実際に写生をはじめてみると、誰よりも本格的に絵と取り組んで熱心に描きつづけたのは井伏さんであつた。最初のうち私は、ひやかし半分に井伏さんの傍へよつて行つたが、その真剣な眼つきを見ただけで到底、冗談など言へる雰囲気ではないとわかつて引き下つた。絵そのものに、構図も描線もシッカリした格調のあるものであつたが、何よりも私は絵筆を持つた井伏氏の気構へ

と姿勢に圧倒されるおもひがした。

このとき以来、私は井伏さんの前に出ると口を慎んで、なるべく話題が絵画や美術のことに及ばぬやうにした。要するに井伏さんにとっては、ものを見て描くといふことに關しては、絵画も文章も同じであり、そこにいささかの気のユルみもあつてはならぬと考へてをられるやうであつた。

井伏さんが、時折りポツンと呟く言葉の中には、じつに印象深いものがあるが、こんなのもその一つだ。

「僕は字を書くのが本当に好きだな。字を書いて暮らせるのなら、代書屋でもいいからなりたいと思つたな……」

この頃では、区役所や登記所のまはり歩いて、代書屋の看板を見かけることがなくなつた。ワープロだのコピー機だの普及發達した現代では、代書はもはや職業にはなり得ないのであらう。代書屋が消滅すれば、右の井伏さんの言葉のニュアンスも伝承は不可能であらう。かいつまんで言へば、代書屋は役所に届ける文書の代筆業であつて、薄暗い店先きに坐つて、六法全書など置いた机に向つて一日中、何かしら書きものをしてゐる姿は、この世で最も辛氣臭い——さしづめ日本版のアカーキー・アカーキエヴィッチともいふべき人たち——であらうかと思はれた。但、右の井伏さんの言葉を聞いてから私は、代書屋を必ずしもそんなに不幸な職業とは思はなくなつた。そして、気の進まぬイヤな原稿を、書かされるやうな場合、自分も代書屋の気分になつて、心の中で「僕は本当に好きだ」と唱へてゐると、原稿を書くのがイヤなどと贅沢なことを言つてはいけないといふ気分になつて、ひとりで何かしら書けてくるといふことがわかつた。

批評・正宗白鳥と小林秀雄

秋山 駿

私が早稲田第二高等学院に入学した昭和二十三年、クラスの者はすべてが、小説家の卵かあるいは革命家の卵であった。面白い時代だった。

小説家の卵達が集って議論を始めると、必ず中央に、早稲田派リアリズムという、漬物石みたいに不細工な問題がごろんと横たわり、議論が激するのであった。新時代にはこんなものは捨てろという派。いやしかし、いつの時代にも小説には必要なものである派。

私は批評志望だったから、そんな議論には加わらなかったが、当時「風雪」に連載された正宗白鳥の『自然主義文学盛衰史』を読み、ははあ、リアリズムによる批評とはこういうものかな、と感じていた。

処々の数ページに感銘を受けたが、そのときの私には、小林秀雄の批評の方が絶対的に魅力であった。白鳥の文章は、大人の、達意の文章であって、その平凡さが、弱年の私には分からなかった。私も、古い物はすべて捨てよと叫んでいるような、戦後という時代によって生み出された不肖な息子達の一人であった。

しかし、批評家志望の道を歩こうとすればどうしても、もう一度この問題に出会う。小林か白鳥か。つまり「文学者の思想と実生活」論争に

出会う。読んで直ちに、私は小林に軍配を上げた。人間の深奥を、白鳥は生のドラマとして捉えているが、小林は精神のドラマとして追おうとしている。小林の方が批評の深化である、白鳥は旧い、と。

ところが、その後十年も過ぎてゆくうちに、なんだか奇妙なことが私の内部に生じた。つまり、言葉が、私の頭脳による判定とは別に、私の内部で、まったく別様の生き方をしていたのである。

つまり、その後、この論争について振り返ると、思い浮かぶのは、ただ白鳥の言葉ばかりであって、小林の言葉ではないのである。

「……遂に野垂れ死にをした経路を、日記で熟読すると悲壮でもあり、滑稽でもあり、人生の真相、鏡にかけて見る如くである。あゝ、わが敬愛するトルストイ翁。」

「人生の真相、鏡にかけて見る如くである」——これが、リアリズムの精髓であろう。

こういう態度を一貫した白鳥の声に、私は次第に深く心を穿たれるようになっていった。そして、批評の高峰としては、小林を第一の山頂とするのか、白鳥を山頂とするのかについて、深く悩むようになって行った。言うまでもなく、小林の絶筆は「正宗白鳥の作について」である。

小林は自分の道を白鳥の声と一致させた。

私は、第七次「早稲田文学」の編集委員であると共に、そのとき、ただ自分の生の材料と自分の考えだけを基礎にするところの、一種の批評文、『歩行と貝殻』を連載させてもらった。私の新しい出発である。いま思えば、何のことはない、その試みは——小林的な精神のドラマを、白鳥式に生のドラマとして捉えることにあった。

第二次「早稲田文学」の表紙



大5. 4 斎藤与里



大2. 1 斎藤与里



明45. 7 斎藤与里



明44. 3 斎藤与里



明44. 1 斎藤与里



大10. 8 森田恒友



大9. 8 織田一磨



大10. 4 津田青楓



大4. 3 斎藤与里



昭2. 5 平福百穂



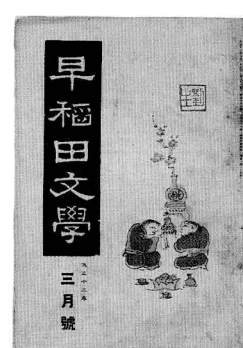
大15. 10 吉川靈華



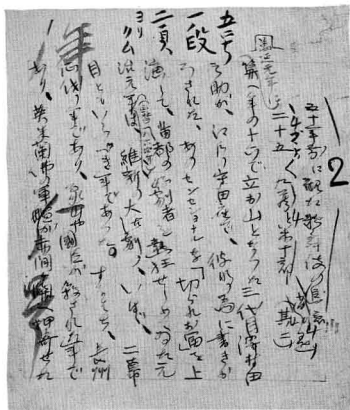
大15. 7 小川芋銭



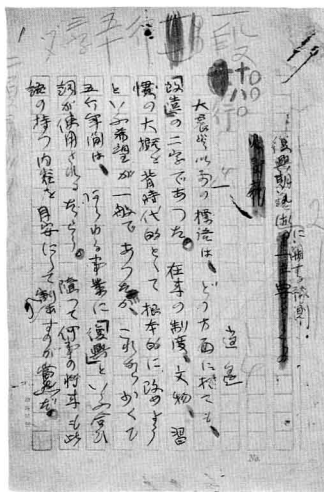
大13. 11 今和次郎



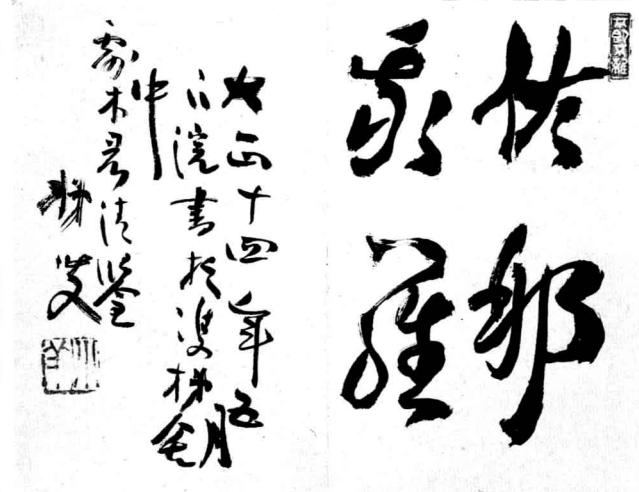
大12. 3 岸田劉生



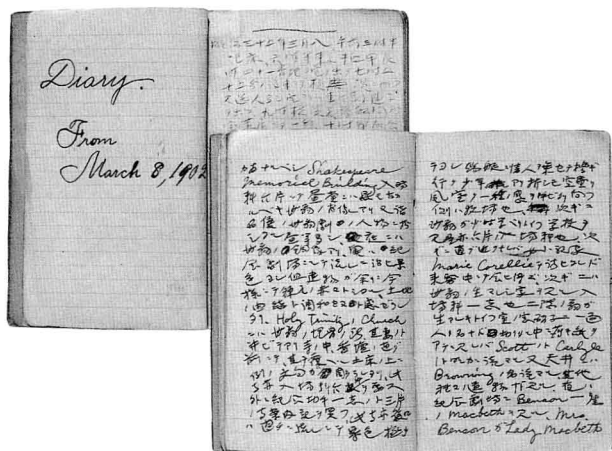
坪内逍遙『五十年前に観た歌舞伎の追憶』原稿



坪内逍遙『復興期芸術に関する予測』原稿



坪内逍遙『佐那羅帖』巻頭



島村抱月滞欧日記



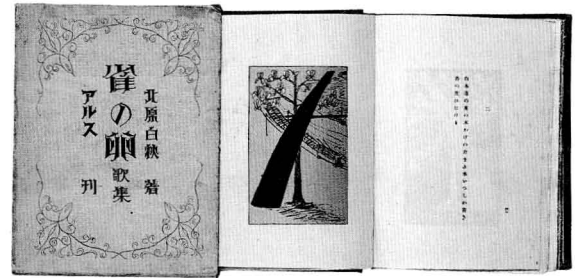
後藤宙外『ありのすさび』草稿(右)と『早稲田文学』(明28. 5)所載原稿



大西祝 妻幾宛絵ハガキ



竹久夢二 西村渚山宛ハガキ 淡彩



北原白秋『雀の卵』 大10. 8 アルス 箱と挿画



金子光晴 色紙



野尻抱影 小尾孝平宛ハガキ



「創作」表紙



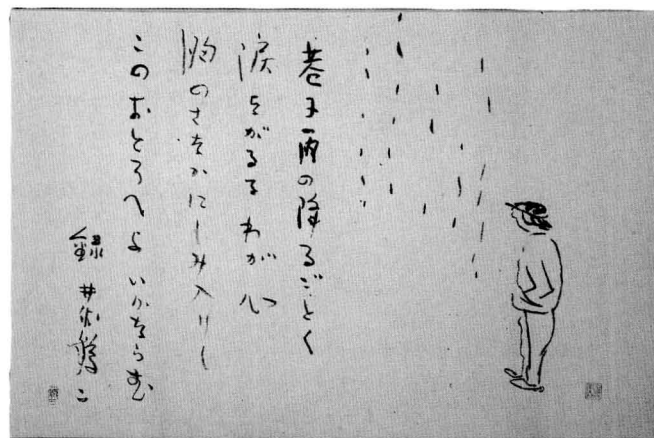
尾崎一雄『暢気眼鏡』
昭12. 4 砂子屋書房



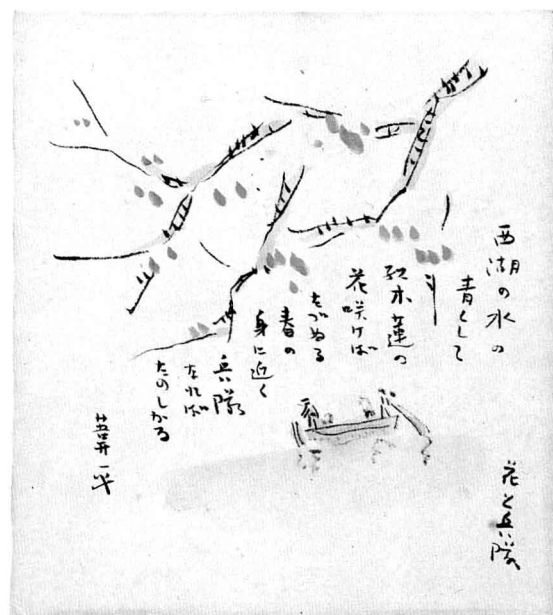
宇野浩二『わが日わが夢』
大11. 2 隆文館 扉



正宗白鳥『異郷と故郷』 昭9. 12 芝書店
表紙 (正宗得三郎画)



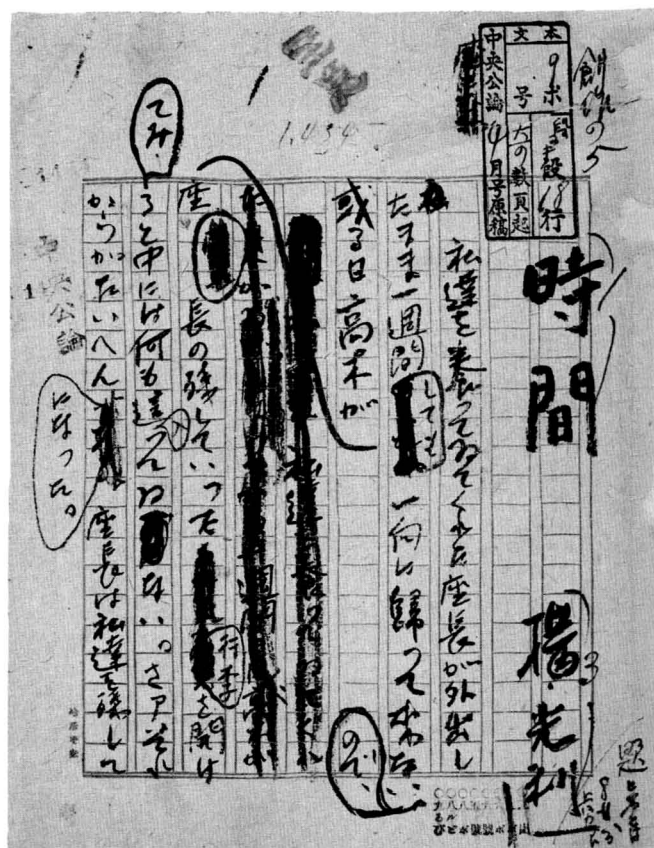
井伏鱒二 画賛



火野葦平 色紙



網野菊『冬の花』 特装本 昭53. 12 三月書房



横光利一『時間』原稿

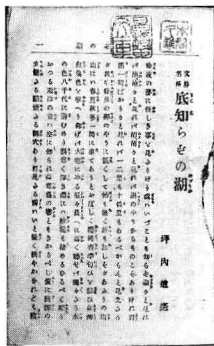


飯田蛇笏短冊（右）と「雲母」表紙絵（河野通勢画）



第1章

逍遙とその周辺



(上) 明18.6 晩青堂

(下) 明24.1 読売新聞付録



創立当初の東京専門学校全景

逍遙と二葉亭

十川 信介

逍遙の周辺を彩った多種多様な知人たちの中で、二葉亭こと長谷川辰之助との関係は、その交情の深さにおいて特別の輝きを放っている。明治十九年一月の出会い以来、『浮雲』発表をはじめとする原稿の斡旋、離婚・再婚などのトラブルの解決、前途の方針の相談等々、四十二年の没後、遺族の面倒にいたるまで、二葉亭が逍遙から受けた恩恵は数かぎりない。

世俗的な目で見ればこのバランス・シートは逍遙の一方的な持ち出しだが、彼が二葉亭の「少しヒステリックなお嬢さまのやうな」(『柿の蒂』)性質を承知で援助を重ねたのは、その弱点を超えた理想の美しさを認めたからであり、二葉亭の気むずかしい心を開かせ、「甘え」と言ってもよいほどの信頼感を抱かせたところに逍遙の大きながある。徳富蘇峰に対して「余は交際の餓鬼となるを好まず」と広言した二葉亭がこれほどに心を許したのは、逍遙と、彼に次ぐ内田魯庵のみである。

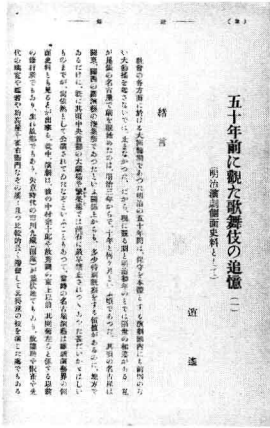
ロシアへ出発する直前、二人が食事をともにした最後の機会に、二葉亭は逍遙の体調を気遣い、その「長い間の闘ひ」をねぎらったというが、そこには近代文学の創成期を手を携えて戦って来た同志の間に流れる、しみじみとした感慨がある。疲れはてた逍遙を自宅まで送り届ける二葉亭には、「理想倒れ」の自分を、その弱さをも含めて包みこんでくれた逍遙の「底知らずの湖」のような愛情が、痛いほど自覚されていたにちがいない。

坪内逍遙

「早稲田文学」の創始者坪内逍遙（本名雄蔵、
「六五」一五三）は安政六年、美濃国加茂郡太田村に
生れた。名古屋で過した少年期には貸本屋「大惣」
などで江戸文学に耽溺、また歌舞伎を好んだ。明
治九年上京、東京大学の前身である開成学校に学
ぶ。そこでの同窓生が、生涯にわたっての同志と
なる高田早苗や市島春城らであった。シェークス
ピアを中心とする外国文学に触れたことが契機と
なって、戯作好き・芝居好きの青年逍遙は、しだ
いに文学・演劇革新の道に踏み出してゆく。



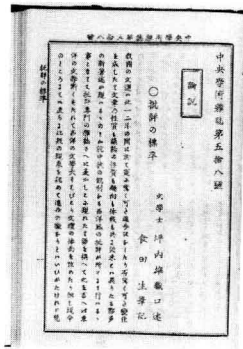
少年時代（16歳）の逍遙と父其榮、
母ミチ。明治7年名古屋にて。



大9.2 「早稲田文学」



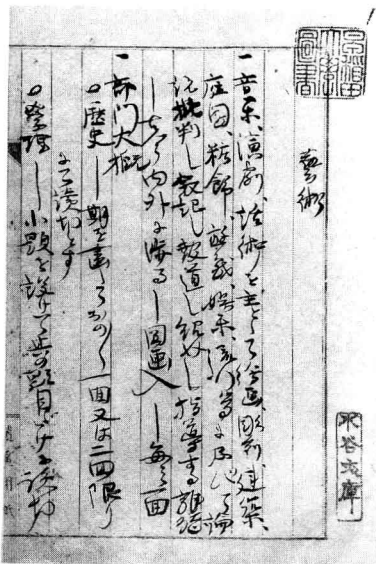
『回憶漫談』原稿「早稲田文
学」大14.7所載。学生時代の
ことに触れている部分。



「中央學術雑誌」第58号 明20.9「早稲田文
学」の発刊以前に、初めて本格的な文学批評
を載せた雑誌。逍遙、早苗「同攻会」の機
関誌であった。



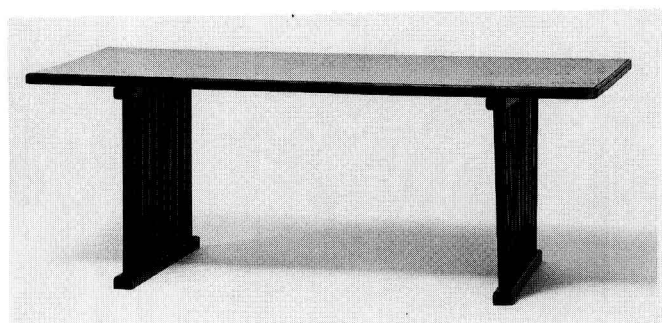
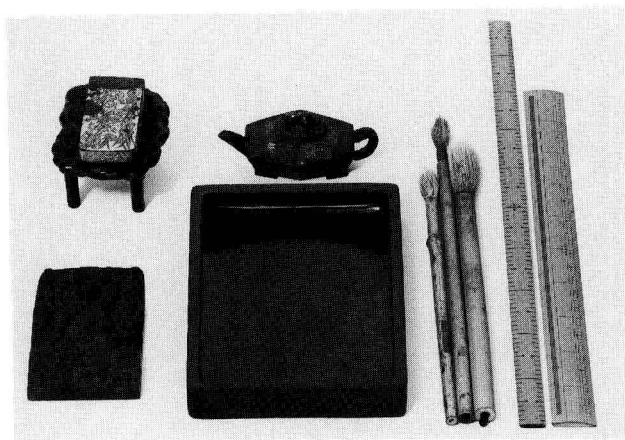
逍遙と高田早苗 明治16年9月
東京大学卒業直後。



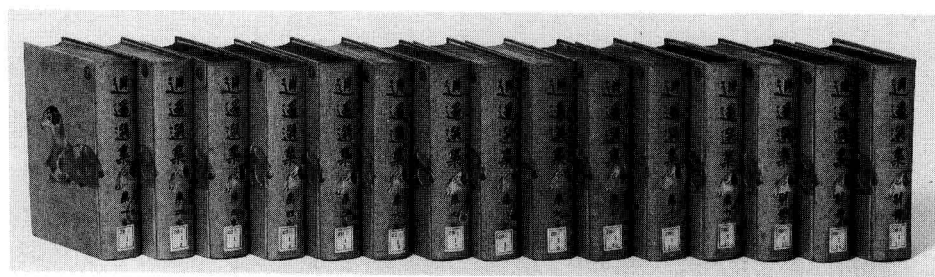
逍遙筆 雑誌「趣味」内規草稿 明39



東京専門学校時代 明治18年の講師と学生たち。前列右端が逍遙、右から3人目が高田。



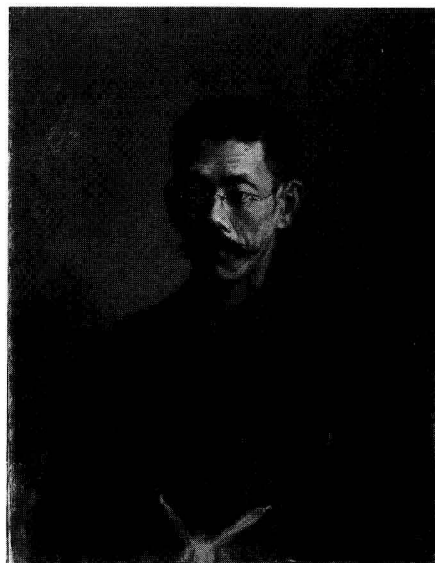
遺愛の机・文房具



『逍遙選集』大15～昭2



古稀祝賀会（早稲田校友会主催，昭4.10.20）左より市島春城，高田早苗，逍遙，浮田和民



肖像 中沢弘光画



明33.12 富山房 教科書 編集に力を入れた。



最終講義（昭2.12.16）の日の逍遙 早稲田大学文学科教室にて。